

希望表現「ねがふ」小考

森脇 茂秀

1. はじめに

築島裕 (1963) 『平安時代の漢文訓読語につきての研究』に「願望表現」に関する記述がある。ここでは、「和文の願望表現には次のような諸形態がある。」とし、(A)「話し手自身の願望を表はす場合」と(B)「他人に対する願望」とに大別した後、「これらの和文の例を通観すると、何れも動詞・副詞等の「詞」を用ゐず、助詞・助動詞の「辞」によつて表現してゐることが知られる。」(755頁)と指摘する。

また、築島 (1963) は、

又、原漢文に願望を示す字があるときは、その字の訓に従つて「ネガフ」「コフ」等の動詞を陳述副詞的に用ゐ

てをり、かやうな語法は訓読語特有と認められる。なほ、この際、原漢文の表現では、話し手自身の願望と他人に対する願望とを区別しないのであるが、訓読文では話し手自身の願望の場合は「…ム」又は「…ジ」で結び、他人に対する願望の場合には、命令文は「ベシ」形で結ぶといふやうに、補読に於て区別してゐることも注意される(傍線は稿者)。

(757頁)

と指摘している。この記述の、漢文訓読に用いられた動詞「ねがふ」は、実質的な意味を表すというよりも、「陳述副詞」的に用いられており、実質的な意味がある程度形式化していると捉えることができるのではないかと思う。

そこで、本稿においては、中古和文において、動詞

「ねがふ」がどのように出現するのかを考察し、「ねがふ」の意味用法を明らかにすることによって、「希望表現」の史的変遷過程の中で、動詞の占める位置を明らかにしたいと思う。

2、「ねがふ」の用例

築島(1963)が指摘するように、動詞「ねがふ」の用例数は、決して多くはない。日本古典対照分類語彙表の「ねがふ」を基に、表にして示すと次のようになる(表I)。

2-1、万葉集中の「ねがふ」

では、作品毎に「ねがふ」の用例を挙げ、考察することにする。まず、『万葉集』について。『万葉集』中の「ねがふ」単独用法は5例であり、複合動詞化したもの、「ねがふ」が前項動詞である「ねがひくらす」が1例、「ね

表 I

見出し	合計	徒然	平家	宇治	方丈	新古	大鏡	更級	紫	源氏	枕	蜻蛉	後撰	土左	古今	伊勢	竹取	万葉	
あふぎねがふ	3		3																
おほしねがふ	1									1									
こひねがふ	2		1							1									
たふとびねがふ	1																		1
ねがふ	62	9	27	4	4	2				10								1	5
ねがはし	5	2								3									
ねがひ	32	5	2			1				23								1	
ねがひおほす	1									1									
ねがひおもふ	1									1									
ねがひくらす	1																		1
ねがひまつはる	1									1									
ねがひわたる	1									1									

がふ」が後項動詞「たふとびねがふ」が1例である。以下用例を示す（一）内は万葉仮名。

「ねがふ」

(1) たらちねの母がそのなる桑すらに願へ(願者)ば衣に着るといふものを

(巻七 1357)

(2) 今夜の早く明けなばすべをなみ秋の百夜を願ひ(願)つるかも

(巻四 548)

(3) 願壽作歌一首

水泡なす仮れる身ぞとは知れどもなほし願ひ(祢我比)つ千年の命を

以前歌六首六月十七日大伴宿祢家持作

(巻二十 4470)

(4) 詠酢醬蒜鯛水葱歌

醬酢に蒜搗きかてて鯛願ふ(願)我れにな見えそ水葱の

(巻十六 3829)

(5) 賀陸奥國出金詔書歌一首并短歌

(略) 老人も 女童も しが願ふ(願)心足らひに 撫でたまひ 治めたまへば ここをしも あやに貴み 嬉しく(略)

(巻十八 4094)

(1) は、「母親の園にうえてある桑でさえも願えば絹の着物として着せてくれるというのに。(どうしてあなたを自分のものにできないのでしょうか)」と解釈できる。

(2) は、この夜が早く明けてしまったら、するすが無いから、秋の長い夜を百夜もつないだような長さを願ったことである。」と解釈できる。

(3) は、「水沫のような、はかない仮りの身であるとは知っているが、なお千年の寿を願ってしまう自分である。」と解釈できるが、二句目の「仮れる身」とは、この世にある物事はすべて仮の物であり、仏の教えのみが真実であるという世間虚仮の思想を指すと考えられるため、仏教的思想を背景にした用例であると考えられよう。

(4) は、「鯛を望んでいる私に、見せてくれるな、水葱

のあつものを。」と解釈でき、(5)は、「老人も女も子供も、その願う心の満足するように愛撫なさりお治めになるの
で」と解釈できる、と考えられる。

さて、『第二版 日本国語大辞典』では「ねがふ」を、

- (1) 神仏に望むところを請い求める。いのる。祈願する。
- (2) 特に、極楽往生を求めて信心する。
- (3) 心の中で望ましい物事の実現や獲得を請い求める。のぞむ。ほしがる。希望する。

に分類する。神仏に関係するという点からすれば、(2)は(1)中を特化したものであり、両者は基本的に同質のものであると捉えられる。この、(1)「神仏に望むところを請い求める。いのる。祈願する。」用法として、『日本国語大辞典 改訂版』は、用例(3) 4470を挙げるが、この用例は、万葉仮名が一字一音表記であり、動詞「ねがふ」の確例であると言っ点からしても重要である。実際この用例は、「仮れる身」等から、「仏教」との関連が想定できるのである。

また、『第二版 日本国語大辞典』は、(3)「心の中で望ましい物事の実現や獲得を請い求める。のぞむ。ほしがる。希望する。」を立項し、該当する用例として、用例(1)を挙げている。

以上のように、『第二版 日本国語大辞典』では、まず、「神仏に望むところを請い求める」用法を挙げ、次に「心の中で望ましい物事の実現や獲得を請い求める」用法を挙げているが、これは、他の辞典類、例えば、小学館『古語大辞典』も同様である。

(6) 水沫(みなわ) なすもろき命も栲縄の千尋にも
がと願ひ暮らし(慕久良志) っ

(巻五 902)

(7) 戀男子名古日歌三首(長一首短二首)

世間の 貴び願ふ(貴慕) 七種の 宝も我れは 何せむに
我が中の 生れ出でたる 白玉の 我が子古日は 明星の
(略)

(巻五 904)

次に「ねがふ」が複合語化した、「ねがひくらす」、「たふとびねがふ」について。まず、(6)「ねがひくらす」の用例は、「千尋にもが」と希望表現「もが」と共起している点注視されるが、『日本古典文学大系』では、「水のあわのように」、「すぐ消えるはかない命も、栲縄のように千尋も長かれと願つて日を送ることである。」と解釈する。また、頭注で「○願ひ―原文、慕。玉編、慕思也。

名義抄、慕 ネガフ」と、「慕」が「ねがふ」と訓ずる理由を指摘している。さらに『新日本古典文学大系』では、「水の泡のようなもろい命ではあるが、(栲縄の)千尋の長さであつてほしいと願ひ暮らして来た。」と解釈し、脚注で、「華嚴音義私記」「石山寺本大般若経音義」の例を挙げ、「人の命を水の泡に譬えることは仏典に例が多い」と仏典との関連性を指摘する。

(7)「たふとびねがふ」の用例は、『第二版 日本国語大辞典』では、(3)「心の中で望ましい物事の実現や獲得を請い求める。のぞむ。ほしがる。希望する。」用法としての例として挙がっている。『新日本古典文学大系』では、「世間の人が、もてはやし、欲しがる七種類の宝も、

私は何で欲しかろうか。」と解釈し、脚注で、「七種の宝」明らかに仏典や漢籍の「掌中珠」の表現と関連する。」とあり、ここでも「神仏」と切り離して考えることは難しいであろう。このように複合動詞化した「ねがふ」は、
仏典と関係していると考えられよう。

「ねがふ」を考察する上で、重要な指摘がある。森田良行(1989)『基礎日本語辞典』は、「ねがう」について、

「願う」はもと「祈(ね)ぐ」に古代の継続の助動詞「ふ」の付いたもの。自分の理想や希望がかなえらるよう神仏など人智を超える対象に祈念し加護を求める行為であった。現代語では、「早く暖かくなればよい」と心に願う」のような、特定の相手を意識しない「思う」に近い例もあるが、多くは特定の相手に対しての希望の意思表示となる。その相手は神仏でも他人でもかまわない(傍線は稿者)。

と指摘する。「ねがう」が元来「神仏など人智を超える

対象に祈念し加護を求める行為」という指摘は、動詞「ねがふ」を考察する上で、きわめて重要な指摘であると考へられる(注1)。

2-2、竹取物語の「ねがふ」

竹取物語中での「ねがふ」は、動詞としての用例が1例、また、「ねがひ」形として名詞として用いられた用例が1例である。以下、用例を挙げる。

(8) 大伴のみゆきの大納言は、わが家にありとある人召し集めてのたまはく、「龍の頸(くび)に、五色にひかる玉あなり。それ取りてたてまつりたらん人には、ねがはんことを叶へん」とのたまふ。

(六龍の頸の玉(大伴の大納言の話)旧大系 45頁)

(9) 中納言よろこび給ひて、よろづの人にも知らせ給はで、みそかに寮(つかさ)にいまして、男どもの中に交じりて、夜を昼になして取らしめ給ふ。くらつまろ、

かく申すを、いといたく喜びてのたまふ。「こ、に使はる、人にもなきに、ねがひをかなふことのうれしさ」とのたまひて、御衣ぬぎてかづけ給ひつ。「さらに、夜さりこの寮にまうで来(こ)との賜ひて、つかはしつ。

(石上の中納言と燕の子安貝 51頁)

(8) は「大伴のみゆきの大納言」の会話文中の用例で、『日本古典文学全集』(75頁)では「それを取って献上する人には、願うことをかなえてやろう」と解釈している。ここでの「かなふ」は、「ねがはんこと」と連体修飾用法中のもので、(3)「心の中で望ましい物事の実現や獲得を請い求める。のぞむ。ほしがる。希望する。」用法であり、「特定の相手に対しての希望の意思表示」であると考へられる。

(9) も中納言の、会話文中の用例であり、「自分(中納言)に仕えている家来でもないのに、願いを叶えてくれるというのは嬉しいものだ。」と解釈できる。ここでも「特定の相手に対しての希望の意思表示」であると考へられるが、「ねがひをかなふ」とあり、「ねがふ」が名詞化し

たものである。この名詞「ねがひ」は、次の『源氏物語』で、比較的散見される。

このように、竹取物語の「ねがふ」「ねがひ」は、「会話文」中に出現し、「特定の相手に対しての希望の意思表示」であると考えられる。

森田良行(1989)は、「ねがい」について、「願ひ」は自力では実現・成就がむずかしいため、他力を期待している、こうなつてほしいという考え。」とし、「自分の心中で考えている内在的事柄で、「その実現を外在する対象へと依存する気持ちである。積極的に申し出、頼み込む場合もあり得る。」とし、「のぞみ」との比較で次のように「ねがい」を指摘している。

	気持ちの現れ方	気持ちの表し方
望み	外在する対象に対して	心中での期待
願ひ	心中に発する内在的事柄から	外在する他者への依存

この森田(1989)の指摘は、勿論現代語を対象としたも

のであるが、『竹取物語』中の「ねがひ」も「自力では実現・成就がむずかしいため、他力を期待している、こうなつてほしいという考え」という指摘と基本的には同様のものであると考えられる。

2-3、源氏物語「ねがふ」の単独用法

「源氏物語」で、動詞「ねがふ」の単独用法は10例である。以下、用例に則してコメントする。

(10) かの御祖母北の方、慰む方なく思ししづみて、おはすらむ所にだに尋ね行かむ、と願ひたまひししるしにや、つひに亡せたまひぬれば、またこれを悲しび思すこと限りなし。皇子六つになりたまふ年なれば、このたびは思し知りて恋ひ泣きたまふ。年ごろ馴れむつびきこえたまひつるを、見たてまつりおく悲しびをなむ、かへすがへすのたまひける。

(桐壺 一 114頁)

(11) 源氏「(略) ひとみちに行ひにおもむきなんに障り
どころあるまじきを、いとかくをさめん方なき心まどひ
にては、願はん道にも入りがたくや」とややましきを、
源氏「この思ひすこしなのめに、忘れさせたまへ」と、
阿弥陀仏を念じたてまつりたまふ。

(御法 四 499頁)

(12) 尼君「(略) のたまはすることの筋、たまさかにも
思しめしかはらぬやうはべらば、かくわりなき齡過ぎは
べりて、かならずかずまへさせたまへ。いみじう心細げ
に見たまへおくなん、願ひはべる道のほだしに、思ひた
まへられぬべき」など聞こえたまへり。

(若紫 一 311頁)

(13) 入道「さらに、背(そむ)きにし世の中もとり返
し思ひ出でぬべくはべり。後の世に願ひはべる所のあり
さまも、思うたまへやらるる夜のさまかな」と、泣く泣
くめできこゆ。

(明石 二 230頁)

(10) は、「願ひたまひしるし」と連体修飾句中の用例

で、「せめて娘の更衣がいまいらっしやる所になりと探
し求めてゆきたいと祈願なさつたしるしであるうか、と
うとうお亡くなりになったので」と解釈できる用例であ
る。また、『第二版 日本国語大辞典』では、(1)「神仏
に望むところを請い求める。いのる。祈願する。」用法
として、この用例を挙げている。

(11) の「ねがふ」は引用節中の用例で、「願はん道」と
連体修飾句中に用いられたものである。この場面は、源
氏が出家もままならぬほど悲嘆にくれるのであるが、こ
こでは、「かねての願いの仏の道にもなかなかはいれな
いのではないか」と解釈できる。また『日本古典文学全
集』頭注では、「出家して修行に専念する生活。」と指摘
している。

(12) は、引用節中の用例で、「願ひはべる道」と連体修
飾句中に用いられたものである。「この世に残しておき
ますのが、願つております往生の妨げと思わずにはいら
れないのでございます」と解釈できるが、同じく『日本
古典文学全集』頭注では、「極楽往生を遂げることが、
自分に残された唯一の希望。」と指摘している。

(13) は、引用節中の用例で、「願ひはべる所」と連体修飾句中に用いられたものである。「来世で生まれたいと願っておりませう極楽の有様も、しぜんに思いやられてまいりますませう今宵の風情でございますよ」と解釈できるが、同じく『日本古典文学全集』頭注に、「極楽浄土。源氏の琴の音によって、極楽の妙音を連想したのである」とある。また、『第二版 日本国語大辞典』では、(2)「特に、極楽往生を求めて信心する。」用法としてこの用例を挙げている。

(14) 入道 命終らむ月日もさらにな知ろしめしそ。いにしへより人の染めおきける藤衣にも何かやつれたまふ。ただわが身は変化のものと申しなして、老法師のためには功德をつくりたまへ。この世のたのしみに添へても、後の世を忘れたまふな。願ひはべる所にだに至りはべりなば、必ずまた対面ははべりなむ。娑婆の外の岸に至りて、とくあひ見んとを思せ。

さて、かの社に立て集めたる願文(ぐわんぶみ)どもを、大きな沈の文箱に封じ籠めて奉りたまへり。

(若菜上 四 108頁)

(15) 紫の上 惜しからぬこの身ながらもかぎりとして尽きなんことの悲しさ

御返り、心細き筋は後の聞こえも心おくれたるわざによ、そこはかとなくぞあめる。

明石の君 薪こるおもひはけふをはじめにてこの世にねがふ法(のり)ぞはるけき

(御法 四 483頁)

(14) は、「ねがひはべる所」と連体修飾句中の用例で、明石の入道が最後の消息を都に送る場面での「消息」記された用例である。この用例は、「念願しておりませう極楽」と解釈できるが、『日本古典文学全集』頭注には直接的に「極楽浄土。」と指摘する。また、後接の「願文」は、「立願した趣旨を書きしるしておいた文章。願ほどこきをするときのため資料として保存していたもの。」であり、大野晋編(2011)『古典基礎語辞典』では、③「特に、極楽浄土に生まれたいと望む。仏法を得たい、仏道に入りたいと思う。」用法としてこの用例を掲げている。

(15) は、歌語「ねがふ」の用例で、「ねがふ法(のり)」と「ねがふ」の連体修飾用法である。ここでは、「千年の間、薪をこり水を汲みなどして仏に仕えてでも法華經を得ようとする思いは、今日の御法会がそのはじめで、今生において得たいと思う仏法を得るまでの道は遠い遠いこととございましょう。そういう仏法を願つていらっしゃるあなた様のご長寿も末長く続くこととございましょう」と解釈できる。ここでもやはり「ねがふ法」得たいと思う仏法」とあるように、仏教との関連を指摘できると考えられる。

このように、連体修飾句あるいは連体修飾用法中に表れた「ねがふ」は、(10)「願ひたまひしるし」、(11)「願はん道」、(12)「願ひはべる道」、(13)「願ひはべる所」、(14)「願ひはべる所」(15)「ねがふ法(のり)」のように、文脈からも明らかのように「仏典」との関連性を指摘できる。

(16) 源氏「人柄は、宮の御人にていとよかるべし。今めかしく、いとなまめきたるさまして、さすがに賢く、

過ちすまじくなどして、あはひはめやすからむ。さてまた宮仕にも、いとよく足らひたらんかし。容貌よくらうらうじきものの、公事などにもおぼめかしからず、はかばかしくて、上の常に願はせたまふ御心には違ふまじ」など、のたまふ気色の見まほしければ、(略)

(藤袴 三 328頁)

(17) おほかたにうち見たてまつる人だに、心とめたてまつらぬはなし。ものの情知らぬ山がつも、花の蔭にはなほ休らはまほしきにや、この御光を見たてまつるあたりは、ほどほどにつけて、わがかなしと思ふむすめを仕うまつらせばやと願ひ、もしは口惜しからずと思ふ妹など持たる人は、いやしきにも、なほこの御あたりにさぶらはせんと思ひよらぬはなかりけり。

(夕顔 一 223頁)

一方、(16)も「願はせたまふ御心」のように連体修飾句の用例であるが、ここでは「主上が、こういう方々と常にお望みあそばしているお心づもりには、違うことがあるまい」と解釈でき、直接的な仏典との関連性はな

いと考えられる。このように連体修飾用法中の「ねがふ」

も仏典との関連がない意味用法がある点、注目されよう。

(17) の「ねがふ」は、希望の助辞「ばや」と承接し、心理文と承接する引用動詞である。ここでは「源氏の君の輝くお姿を拜見する人々は、身分相応にいとしく思うわが娘をお仕え申させたいと願ひ」と解釈できるが、(16)同様、直接的な仏典との関連性はないと考えられる。

(18) 少将「いさや。はじめよりしか言ひ奇れることをおきて、また言はんこそうたてあれ。されど、わが本意は、かの守の主の人柄もものしく大人しき人なれば、後見にもせまほしう、見るところありて思ひはじめしことなり。もはら顔容貌のすぐれたらん女の願ひもなし。品あてに艶ならん女をa願はば、やすくえつべし。されど、さびしう事うちあはぬみやび好める人のはてはては、ものきよくもなく、人にも人ともおほえたらぬを見れば、すこし人に譏(そし)らるとも、なだらかにて世の中を過ぐさむことをb願ふなり。守に、かくなんと語らひて、さもとゆるす気色あらば、何かはさも」とのたまふ。

(東屋 六 19頁)

(18) は会話文中の用例で、「わたしは顔かたちの美しい女をという願ひはいっこうに持っていない。上品で優雅な女を妻にしようとa願えばたやすく得られることなのだ」、「多少は人から悪口を言われたとしても、安穩に世間を渡ることをb願つているのだ」と解釈できる。(18a) は「艶ならん女」と、「ねがふ」具体的な対象を「を」格で表示しているので、動作性が明確であり、(18b) も、「ねがふ」具体的な対象を「を」格で表示しており、大野(2011)『古典基礎語辞典』では、「②ある物や状態を手に入れたいと思う。得たいと思う。」の用例としてこの用例を掲げている。

2-4、源氏物語「ねがふ」の複合動詞

『源氏物語』では、動詞「ねがふ」が前項となる複合動詞(ねがひ——形)は、「ねがひおもふ」1例、「ねが

ひおぼす」1例、「ねがひまつはる」1例、「ねがひわたる」1例である。以下、用例を示す。

(19) (略)源氏「(略)かくてものしたまふは、いかでさやうならむ人の気色の、深さ浅さをも見むなど、さうざうしきままに願ひおもひしを、本意なむかなふ心地しける」など、ささめきつつ聞こえたまふ。

(常夏 三 220頁)

(20) 仲人「何かと思し憚るべきことにもはべらず。かの御心ざしは、ただ一ところの御ゆるしはべらむを願ひおぼして、いはけなく年足らぬほどにおはすとも、真実のやむごとなく思ひおきてたまへらんをこそ、本意かなふにはせめ。(略)」と、いと多く、よげに言ひつつくるに、いとあさましく鄙びたる守にて、うち笑みつつ聞きあたり。

(東屋 六 23頁)

(21) 僧都「なにがしはべらん限りは、仕うまつりなん。何か思しわづらふべき。常の世に生ひ出でて、世間の榮華に願ひまつはるる限りなん、ところせく棄てがたく、

我も人も思すべかめる。かかる林の中に行ひ勤めたまはん身は、何ごとかは恨めしくも恥づかしくも思すべき。このあらん命は、葉の薄きが如し」と言ひ知らせて、(略)

(手習 六 336頁)

(22) 親たちも、かかる御迎へにて上る幸ひは、年ごろ寝でも覚めても願ひわたりし心ざしのかなふと、いとうれしけれど、あひ見で過ぐさむいぶせさの、たへがたう悲しければ、夜昼思ひはれて、同じことをのみ、入道「さらば若君をば見たてまつらでははべるべきか」と言ふよりほかのことなし。

(松風 二 392頁)

(19) は、引用文中の「ねがひおもふ」の用例で、源氏が西の対で和琴を弾き玉壘と唱和する場面で「ねがひおもふ」が用いられたものである。この用例は、「退屈のあまりにそんなことを願っていたのですが、その希望がかなう気持なのですよ」と解釈できるが、『第二版 日本国語大辞典』で、(3)「心の中で望ましい物事の実現や獲得を請い求める。のぞむ。ほしがる。希望する。」の

用例として挙げられているものである。

(20) は、引用文中の「ねがひおほす」の用例で、「ただあなた様お一人が婿としてお認めになりますことを望みに思つておいでなので」と解釈できる。また、「ねがひおほす」の具体的な対象を「を」格で表示している。

(21) は「僧都」の会話文中に「ねがひまつはる」が用いられたものであるが、「世間の榮華を願ひ執着しているかぎりには、それに束縛されて世を捨てにくいもの」ともなすもお考えになるようです。」と解釈できる。

(22) は「ねがひわたる」の用例で、京より明石の君の迎への使者が下る場面である。ここでは、「このようなお迎えを受けて上京する幸福は、長年の間（源氏が帰京して以来三年の間）寝ても覚めても願ひつづけてきた本望が叶ったわけだ」と、じつにうれしいにはうれしいけれども」と解釈できる。

次に、動詞「ねがふ」が後項となる複合動詞（——ねがふ形）は、「おほしねがふ」が1例、「こひねがふ」が1例である。

(23) 常陸守「(略)ただ真心に思しかへりみさせたまはば、大臣の位を求めむと思し願ひて、世になき宝物をも尽くさむとしたまはんに、なき物はべるまじ。(略)」と、よろしげに言ふ時に、いとうれしくなりて、(略)

(東屋 六 25頁)

(24) 御仏名も今年ばかりにこそは、と思せばにや、常よりもことに錫杖の声々などあはれに思さる。行く末ながきことを請ひ願ふも、仏の開きたまはんことかたはらいたし。雪いたう降りて、まめやかに積りにけり。

(幻 四 534頁)

(23) は引用文中の「おほしねがふ」の用例で、「大臣の位を得ようとお望みになつて、この世にまたとない宝物を使い尽くそうとなさつたところで、手元にそろわぬ物はございますまい。」と解釈できる場面である。ここでは「おほしねがふ」が「求めむ」と「と」格が承接しており、(17) の、希望の助辞「ばや」と承接し、心理文を構成する用例と同質のものであると考えられる。

(24) は「こひねがふ」の用例で、「いつまでもご長命を

と祈願するのも、仏がどうお聞きになられたのであろうかと、きまりわるく思われる。」と解釈できる。『日本古典文学全集』頭注に「仏がお聞きになったら、出家を思う一方で長寿を祈る自分の性根の矛盾を軽蔑するだろう、と源氏は思うのである。」とあるように、「御仏名」「仏の聞きたまはんこと」と共起しており、ここでは仏典との関連性を指摘できる。また、「こひねがふ」の具体的な対象を「を」格で表示している。

2-5、源氏物語の「ねがひ」

『源氏物語』では、動詞「ねがふ」の名詞形「ねがひ」が15例、用例がある。以下、用例を示す。

2-5-1、無助辞

(25) 薫さらば、その客人に、かかる心の願ひ年経ぬるを、うちつけになど浅う思ひなすまじうのたまはせ知らせたまひて、はしたなげなるまじうはこそ。いとうひうひしうならひにてはべる身は、何ごともをこがましきまでな

ん」と、語らひきこえおきて出でたまひぬるに、(略)

(東屋 六 48頁)

(25) の「ねがひ」は、「それではその客人に、こういう念願を長年もちつづけていることを、唐突な思いつきでなどと浅く取ってくれないようによくお伝えくださって」と解釈できる。ここでの「ねがひ」と「年経」とは直接承接し、介在する助辞はない。

2-5-2、ねがひもなし

(26) 少将「いさや。はじめよりしか言ひ寄れることをおきて、また言はんこそうたてあれ。されど、わが本意は、かの守の主の人柄もものしく大人しき人なれば、後見にもせまほしう、見るところありて思ひはじめしことなり。もはら顔容貌のすぐれたらん女の願ひもなし。品あてに艶ならん女を願はば、やすくえつべし。されど、さびしう事うちあはぬみやび好める人のはてはは、ものきよくもなく、人にも人ともおほえたらぬを見れば、すこし人に譏(そし)らるとも、なだらかにて世の中を

過ぐさむことを願ふなり。守に、かくなんと語らひて、
さもとゆるす気色あらば、何かはさも」とのたまふ。

(東屋 六 19頁)

(26) の「ねがひ」は会話文中の用例で、「わたしは顔か
たちの美しい女をという願ひはいっこうに持つていな
い。上品で優雅な女を妻にしようと願えばたやすく得ら
れることなのだ」と解釈でき、「願はば」「願ふなり」が
後続している場面である。ここでの「ねがひ」は「自力
では実現成就がむずかしいため、他力を期待している、
こうなつてほしいという考え」で、「自分の心中で考え
ている内在的事柄で、その実現を外在する対象へと依
存する気持ち」である現代語の「ねがい」の用法と同質
のものと考えられる。

2-5-3、「ねがひ」がVする) 名詞

(27) 源氏「(略)そこはかとなく、つれづれに心細うの
みおほゆるを、同じ心に答へたまはむは、願ひかなふ心
地なむすべき。何やかかと、世づける筋ならで、その荒

れたる簀子にたたずままほしきなり。(略)」など、語ら
ひたまふ。

(末摘花 一 351頁)

(28) 北の方「かくてさぶらひたまはば、年ごろの願ひ
の満つ心地して、人の漏り聞きはべらむめやすく、面
だたしきことになん思ひたまふるを、さすがにつつまし
きことになんはべりける。深き山の本意は、みさをにな
んはべるべきを」とてうち泣くもいとほしくて、(略)

(東屋 六 69頁)

(29) 思ひ離るる世のとぢめに、文書きて、御方に奉れ
たまへり。

入道(略)またこの国のことに沈みはべりて、老の
波にさらにたち返らじと思ひとぢめて、この浦に年ごろ
はべりしほども、わが君を頼むことに思ひきこえはべり
しかばなむ、心ひとつに多くの願(ぐわん)を立てはべ
りし。その返申、たひらかに、思ひのごと時に逢ひたま
ふ。若君、国の母となりたまひて、願ひ満ちたまはん世
に、住吉の御社をはじめ、はたし申したまへ。(略)とて、
月日書きたり。

(27)の「ねがひ」は会話文中の用例で、いらだつ源氏が、命婦に手引きを促す場面で、「姫君が私と同じころになつてお返事をくださるならば、それこそ願いがかなつたという気持になるのだが。」と解釈できる。ここでは、「ねがひかなふ」が「心地」を修飾する連体修飾用法である。

(28)の「ねがひ」は会話文中の用例で、「こうしておそばにお仕えておいですと、長年の私の願いがかなうような心地がいたしました」と解釈できる。ここでは、「年ごろの願ひの満つ」が「心地」を修飾する連体修飾用法で主格「の」が顕在化している。

(29)の「ねがひ」は、「ひそかに自分ひとりでも多くの願を立てました。」という「願(ぐわん)」が先行し、「若君(明石の女御)が国の母とおなりなされて、願ひが満たされましたあかつきには、住吉の御社をはじめ、願ほどきをお果たしくだされ。」と解釈できる場面である。ここでは、「願ひ満ちたまはん」が「世」を修飾する連体修飾

用法である。

2-5-4、願ひ+「に」

(30) そのほかの心もとなくさびしきこと、はた、なけば、行ひの方の人は、その紛れなく勤め、仮名のよろづの草子の学問心に入れたまはむ人は、またその a 願ひに従ひ、ものまめやかにはかばかしきおきてにも、ただ心の b 願ひに従ひたる住まひなり。さわがしき日ごろ過ぐして渡りたまへり。

(初音 三 147頁)

(31) 仏の御隔てに、障子はかりを隔ててぞおはすべかめる。すき心あらむ人は、気色ばみ寄りて、人の御心ばへをも見まほしう、さすがにいかがとゆかしうもある御けはひなり。されど、さる方を思ひ離るる願ひに山深く尋ねきこえたる本意なく、すきすきしきなほざり言をうち出であざればまむも事に違ひてやなど思ひ返して、

(略)

(橋姫 五 125頁)

(32) (略) 蕉「いとかく慰めん方なきよりは、と思ひ寄

りはべる人形の願ひばかりには、などかは山里の本尊(ほんぞん)にも思ひはべらざらん。なほ、たしかにのたまはせよ」と、うちつけに責めきこえたまふ。

(宿木 五 439頁)

(30)の「ねがひ」は、「仏の道を行う向きの人余事に氣をとられることもなくお勤めに精を出し、仮名書きのいろいろの草子の学問にご熱心な方は、またそのa望みどおりになさつて、実生活上のしつかりとした取り決めの点でも、ただ御方々のb望みどおりになつてゐる日常である。」と解釈できるが、「両者とも「したがふ」対象として出現し、助辞「に」と承接している。

(31)の「ねがひ」は「お心がまえをためしてみたいような」と希望の助辞「まほし」が先行し、「けれども、「そうした俗世の色恋の迷いを思い捨てたいという願ひから山深くお訪ね申している、その本意にそむいてまで、色めかしいでまかせの言葉を口に出して戯れかかるのもわが志に反することではないか」などと思ひ返して、「と解釈できる。ここでの「ねがひ」は、助辞「に」と承接

している。

(32)の「ねがひ」は会話文中の用例で、「人形(ひとがた)の願ひの程度には、その人をあの山里の本尊にと思つてもよいではございませんか」と解釈できる。ここでは「本尊」とあることから、明らかに仏典との関連性を指摘できるが、『日本古典文学全集』頭注には、「亡き大君ほどに思えないにしても、人形をと望んだ気持と同程度に望むとする。」とある。また、ここでの「ねがひ」は、助辞「に」と承接している。

2-5-5、願ひ+「を」

(33)蕉「などてか。ともかくも人の聞き伝へばこそあらめ、愛宕の聖だに、時に従ひては出でずや^あはありける。深き契りを破りて、人の願ひを満てたまはむこそ尊からめ」とのたまへば、弁の尼「人濟すこともはべらぬに。聞きにくきこともこそ出でまうで来れ」と、苦しげに思ひたれど、(略)

(東屋 六 80頁)

(34)入道「(略)そのゆゑは、みづからかくつたなき山

伏の身に、今さらにこの世の栄えを思ふにもはべらず、過ぎにし方の年ごろ、心ぎたなく、六時の勤めにも、ただ御ことを心にかけて、蓮の上の露の願ひをばさしおきてなむ、念じたてまつりし。(略)とて、月日書きたり。

(若菜上 四 105頁)

(35) 入道「(略)女の童のいときなうはべりしより、思ふ心はべりて、年ことの春秋ごとに必ずかの御社に参ることなむはべる。昼夜の六時の勤めに、みづからの蓮(はちす)の上の願ひをばさるものにて、ただこの人を高き本意かなへたまへとなん念じはべる。(略)」など、すべてまねぶべくもあらぬ事どもを、うち泣きうち泣き聞くゆ。

(明石 二 235頁)

(36) (略)うちつけにふと移らむ心地、はた、せず。蕉「いでや、その本尊、願ひ満てたまふべくはこそ尊からめ、時々心やましくは、なかなか山水も濁りぬべく」とのたまへば、はてはては、中の君「うたての御聖心や」と、ほのかに笑ひたまふもをかしう聞くゆ。

(東屋 六 46頁)

(37) かの人形の願ひものたまはで、ただ、蕉「おぼえなきものはさまより見しより、すずろに恋しきこと。さるべきにやあらむ、あやしきまでぞ思ひきこゆる」とぞ語らひたまふべき。人のさまいとらうたげにおほどきたれば、見劣りもせず、いとあはれと思しけり。

(東屋 六 85頁)

(38) (略) 故宮の御ことなど申し出でて、鼻しばしばうちかみて、阿闍梨「いかなる所におはしますらむ。さりともし涼しき方にぞ、と思ひやりたてまつるを、先つころ夢になむ見えおはしましし。俗の御かちにて、世の中を深う厭ひ離れしかば、心とまることなかりしを、いささかうち思ひしことに乱れてなん、ただしばし願ひの所を隔たれるを思ふなん、いと悔しき、すすむるわざせよ、といとさだかに仰せられしを、(略)」など申すに、君もいみじう泣きたまふ。

(総角 五 311頁)

(33) の「ねがひ」は蕉の会話文中の用例で、「聖(ひじり)」、

「深き契り」(『日本古典文学全集』頭注「俗界との交渉を断つて勤行に専念するという誓願」)等、仏典との関連性を指摘できる場面である。ここでは、「愛宕の聖だつて、ときよつては京に出て行つたではありませんか。深い誓いを破つてでも人の願いをお聞き届けになるからこそありがたいでしょう」と解釈できるが、ここでの「ねがひ」は下二段動詞「満つ」の対象となつている。

(34)の「ねがひ」は、明石の入道が最後の消息を都に送る場面で、「極楽往生の願い」をもさておいてお祈り申上げてきたのですから。」と解釈できるが、ここでの「ねがひ」は「さしおく」対象「を」と承接している。

(35)の「ねがひ」は、入道の会話文中の用例で、「自身の極楽往生の願いは、それはそれとしても、ただこの娘のことを、『どうかこの高望みをおこなえくださいまし』とお祈りしております。」と解釈できる。ここでの「ねがひ」は「を」と「は」の接続形「をば」と承接している。(36)の「ねがひ」は会話文中の用例で、『日本古典文学全集』頭注では、「薫はかつて(略)中の君に言った。大君の像を宇治に作りたいとする薫が、浮舟の存在を教

えられ関心を寄せる言葉であつた。ここでは、その浮舟が真に自分を悟りに導いてくれる本尊になりうるかと言う。眼前の中の君への執念をふりすてて、浮舟に移ることは困難であろうとする。」とする。ここは、「さあ、その本尊ですが、私の願いを満たしてくださいるのであつたらありますがたくもありませんが、ときどきつらい思いをさせられるようですと、かえつて山水も濁つてしまいうで」とおっしゃるので」と解釈できるが、ここでの「ねがひ」は(33)と同じく「満つ」の対象となつている。(37)の「ねがひ」は「例の身代わりになりたいというようなことは口にお出しにならず」と解釈できるが、ここでの「ねがひ」は「のたまふ」の対象であると考へられる。(38)の「ねがひ」は会話文中の用例で、「少しばかり心にかかる一ふしがあつて往生の一念が乱れたために今しばらくの間、本願の極楽浄土から遠ざかつていることを考へると、まことに後悔される。」と解釈でき、『日本古典文学全集』頭注では「極楽浄土」と明示する。また、ここでの「ねがひ」は直接承接してはいないが、「の」を介在し「ところ」を修飾する連体修飾用法で、「へだつ

対象「を」と承接している。

2-6、源氏物語の「御ねがひ」

また、「源氏物語」では、「御ねがひ」形が8例、用例が存する。以下、用例を示す。

2-6-1、無助辞

(39) 乳母「中納言は、もとよりいとまめ人にて、年ごろもかのわたりに心をかけて、外さまに思ひ移ろふべくもはべらざりけるに、その思ひかなひては、いとどゆるぐ方はべらじ。かの院こそ、なかなか、なほいかなるにつけても、人をゆかしく思したる心は絶えずものせさせたまふなれ。その中にも、やむごとなき御願ひ深くて、前齋院などをも、今に忘れがたくこそ聞こえたまふなれ」と申す。

(若菜上 四 22頁)

(40) 柏木「(略)今は、いよいよいとかすかなるさまに

思し澄まして、いかめしき御よそひを待ちうけたてまつりたまはむこと、願はしくも思すまじく見たてまつりはべりしを、事どもをばそがせたまひて、静かなる御物語の深き御願ひかなはせたまはむなん、まさりてはべるべき」と申したまへば、いかめしく聞きし御賀の事を、女二の宮の御方さまには言ひなさぬも、労ありと思す。

(若菜下 四 267頁)

(39)の「御ねがひ」は「乳母」の会話文中の用例で、「とりわけ、貴い素姓のお方をとの希望が強く」と解釈できる。「日本古典文学全集」頭注には、「血筋の貴い女性を得たいとの願ひ。源氏の妻妾たちのうち、紫の上・末摘花は親王の娘。他は臣下の娘である。ここは暗に皇女をとの願望があったことをにおわせる。」とあるが、ここでの「御ねがひ」は、「やむごとなき御願ひ」(が)深くて」と無助辞の主語であると考えられる。

(40)の「御ねがひ」は柏木と源氏との対話で、柏木の会話文中の用例である。「朱雀院はますますひっそりとした様子で仏道に専念なさって、「仰々しい儀式をお待

ち受けあそばすことは、お望みでないようにお見受けいたしましたので、何事も簡素になさいます、静かにお話しあいをおそばしたいという院の強い念願が実現なさるほうがよろしゅうございましょう」と申し上げられるので」と解釈できる。ここでは、「ねがふ」が副詞句化した「願はしくも」と近接している点も注目されるが、「かなふ」対象として「ねがふ」が出現していると考えられる。

2-6-2、御願ひとは

(41) (略) 仲人「(略) (略) さすがにその御願ひはあながちなるやうにて、をさをさ承けられたまはで、け劣りておはし通はんこと便なかるべきよしをなむ、切に譏り申す人々あまたはべるなれば、ただ今思しわづらひてなむ、(略)」と仰せられつれば」と言ふに、(略)

(東屋 六 20頁)

(42) 妹尼「心地よげならぬ御願ひは、聞こえかはしたまはんに、つきなからぬさまになむ見えはべれど、例の人にてあらじと、いとうたあるまで世を恨みたまふめれば、残り少なき齡の人だに、今はと背きはべる時は、

いともの心細くおほえはべりしものを、世をこめたるさかりにては、つひにいかか、となん見たまへはべる」と、親がりて言ふ。

(手習 六 303頁)

(41) の「御ねがひ」は「仲人」の会話文中の用例で、「やはりそうしたお望みは無理なようで、ほとんど婿としてはお認められにならず、ほかよりも何かと劣った扱いで通うというのは不都合なことであろう」と解釈できる。ここでは、「御ねがひ」は係助辞「は」と承接している。(42) 「御ねがひ」は「妹尼」の会話文中の用例で、「樂しげならぬ人をとのご希望でしたら、あの人はおつきあいなさいますのに不似合いではなさそうに見えますけれども」と解釈でき、「日本古典文学全集」頭注には、「苦勞をし悩みをもった女を妻にしたい、との中将の希望」とある。ここでの「御ねがひ」は係助辞「は」と承接している。

2—6—3、御願ひに

(43) 涙のさま、げにいと心ことなり。人しげう見ゆるのみなむ、御願ひに背きける。

(明石 二 224頁)

(44) 中の君「あはれなる御願ひに、また、うたて御手洗川近き心地する人形こそ、思ひやりいとほしくはべれ。黄金求むる絵師もこそなど、うしろめたくぞはべるや」とのたまへば、蕉「そよ。その工匠も絵師も、いかでか心にはかなふべきわざならん。近き世に花降らせたる工匠もはべりけるを、さやうならむ変化の人もがな」と、とぎまかうざまに忘れん方なきよしを、嘆きたまふ気色の心深げなるもいとほしくて、(略)

(宿木 五 437頁)

(43) の「御ねがひ」は、「涙の様子は、なるほどじつに特別の風情がある。人の往き来が多そうに見えるのだけが、「静やかに隠ろふべき隈」を期待していた源氏の君の「希望」に添わないのであった。」と解釈できる。ここでは、「背く」対象として出現し、助辞「に」と承接

している。

(44) の「御ねがひ」は蕉と中の君との会話で、中の君の会話文中の用例である。また、「心にはかなふ」「人もがな」と希望の助辞表現と近接している。ここでは「ありがたいお志ではございますが」と解釈できるが、ここでの「御ねがひ」は、助辞「に」と承接している。

2—6—4、御願ひをば

(45) ほともすこし離れたるに、おのづからもの言ひさがなき海人の子もや立ちまじらんと申し憚るほどを、さればよと思ひ嘆きたるを、げに、いかならむと、入道も極楽の願ひをば忘れて、ただこの御気色を待つことにはす。今さらに心を乱るも、いといとほしげなり。

(明石 二 248頁)

(45) の「御ねがひ」は、「入道も極楽往生の祈願は忘れて、源氏の君の御入来を待ち受けることだけにかかりきりである。」と解釈できる。ここでは、「極楽」とあり、主体が「入道」ということから、仏典との関連性を指

摘できるが、「御ねがい」は「忘る」対象として出現し、助辞「をば」と承接している。

2-6-5、御願いの

(46) もとありける池山をも、便なき所なるをば崩しかへて、水のおもむき、山のおきてをあらためて、さまざまに、御方々の御願ひの心ばへを造らせたまへり。

(少女 三 72頁)

(46) の「御ねがひ」は「地の文」の用例で、「(梅壺中宮、花散里、明石の君などの)四つの町それぞれに住む御方々の希望の趣向(に添うような風趣)をお造りになられた。」と解釈できる。ここでの「御ねがひ」は「の」を介在し「心ばへ」を修飾する連体修飾用法である。

3、おわりに

以上、中古和文の「ねがふ」「ねがひ」の意味用法を考察した。その結果、動詞「ねがふ」は、「自力では実現・

成就がむずかしいため、他力を期待している、こうなつてほしいという考え」であり、助辞による希望表現の「詠嘆的希望表現」と極めて近似の性格を有していると捉えることができると考えられる。「ねがふ」が中古和文に出現する場合は、仏典との関連性がある場合が多いが、実現困難であることが仏典と結びついたのであろうと思われる。したがって、助辞による希望表現と意味的に重なる面があり、中古和文に出現する必然性は低かったのではなかったかと考えられる。さらに動詞「ねがふ」は、「ねがはくは」のように、副詞句化する用法もあるが、このことは、希望表現形式に出現する、助辞「かし」の変遷過程と近似していると考えられる。

「のぞむ」等の、他の希望表現を担う動詞については、別稿を用意している。

ご教授賜れば、幸いである。

(注)

(注1) 大野晋編(2011)『古典基礎語辞典』では、「ねがふ」を次のように記述する(傍線は稿者)。

ネガフは、神仏や他人の助力、または、恵みよって自分の求めることが実現するように求め祈る意。また、単に物事の実現や獲得を欲する意。「請ひ願ふ」の形で、また、漢文訓読系の文章では「願はくは」の形で用いられることが多い。(略) ノゾムは神仏とは関連のない語である。

また、「語釈」を、

①神仏や他の人の力によって、自分の望みが達成するよ
うに、心を尽くして頼む。(万・4470)

②ある物や状態を手に入れたと思う。得たいと思う。

(万・548)

③特に、極楽浄土に生まれたいと望む。仏法を得たい、
仏道に入りたいと思う。

とするが、森田良行(1989)の指摘と同じく考えられるであろう。

『日葡辞書』では、

Negaiōtia ネガイ、ウ、ウタ(願ひ、ふ、うた) 願ひ望む。
¶GoXoto negō. (後生を願ふ) 救霊を願ひ望む。

Negai ネガイ(願ひ) 願望。

Negacuaia ネガワクワ(願はくは) どうか…であつてほしい、または、デウス(Deos 神)の思し召しにかないますように。

Negaxu ネガワシユウ(願はしう) 副詞。

のように、直接的な神仏の記載はないが、例文や仏教の「願ひの糸」を掲載しており、「神仏など人智を超える対象に祈念」するという関連性が想起させる。

(参考文献)

大野晋編(2011)『古典基礎語辞典』

築島裕(1993)『平安時代の漢文訓読語につきての研究』

森田良行 (1989) 『基礎日本語辞典』

森脇茂秀 (1994) 「希望表現の二形式―助辞「もが」―て

しか「形を中心に」―「山口国文」17

森脇茂秀 (1999) 「終助辞「かし」をめぐって―中世後

期を中心に―「山口国文」22

森脇茂秀 (2000) 「希望の助辞「もがな」「がな」をめぐっ

て (一)」「別府大学国語国文学」42

森脇茂秀 (2001) 「希望の助辞「もがな」「がな」をめぐっ

て (二)」「山口国文」24